

## 1 はじめに

- ふくしとは「ふだんの 暮らしの しあわせ」である。福祉とは毎日の暮らしの中にある。福祉=生存権をイメージしがちであるが、ソーシャルワークは、人権を基盤として制度やサービスも使いながら、その人らしい暮らしを実現し、その人にとっての幸せを応援していく仕事である。スクールソーシャルワーカー（以下、SSW）は、それを学校の中で行いながら、特に子ども達の今現在および将来の幸せや自由、権利を守っていく。そして、一人一人が主体となり自分らしい暮らしを送るためには、教育が必要である。
- SDGs は広い意味での福祉である。誰ひとり取り残さないことが大事である。
- 社会的自立とは、誰にも助けられずに生活していける、という事ではない。むしろ、「助けて」と言える事、助けてくれる人が自分の周りにいる事、助けてくれる人がいる事を知っている事が重要である。子どもたちに「助けて」と言っても良いのだという事を伝えていくことが大事である。

## 2 不登校の現状

- 就学前の利用場所での行き渋りがある。「不登園」という言葉もある。そこには親子の不安がある。子どもは親から離れる不安、親は子どもが不安を感じてまで行かせることに対する不安である。この背景には、子育て世代の孤独や不安などがある。

## 3 生徒指導提要の改訂

- 学校ではオンライン学習が行われていたり、不登校対応や支援も工夫されたりしている。不登校の子どもたちに支援が届き、パワーがあがってくると、必ず「学びたい」「知りたい」という気持ちが出てくる。その時こそ、学校の先生の専門性である「教育」の力が必要である。先生方には授業力を高め、授業に自信を持って欲しい。魅力的な授業をしているということ、子どもたちに伝えられるように取り組んで欲しい。
- 目指すのは子どもの well-being（生き生きと自己実現できている状態）である。子どもたちの幸せ、自己実現、社会的自立を目指すということは、教員としての自身の well-being が向上し、教員としての幸せに変えていくということ意識していくと良い。「情報共有=よるこびの共有」である。子どもたちの少しの変化が子どもたちに関わる教員やSSW等の喜びにつながるようなことができれば学校の活力もあがる。

## 4 スクールソーシャルワーク

- 人々が押し込められた力を自分で気づき、自分自身で自分の力が高まる瞬間を経験すること（エンパワメント）が大事である。子どもたちはパワーをためた時に一歩前進する。「あなたには存在の意義がある」、「あなたには人として生きていく価値がある」と伝えられるような支援や繋がりを届けることが、教育とソーシャルワークの重要なミッションである。
- 支援をしていくにあたり子どもたちの生活体系を考えていく必要がある。マイクロレベルは、個人や家族のグループであり、メゾレベルは学校、職場、各種団体、福祉機関、会社等である。マクロレベルは制度や政策である。ソーシャルワークの視点はこれを意識することである。メゾレベルからマクロレベルを行き来しながら、その関係性やシステムに着目して支援している。
- 「自分が困ったときに助けを求めるのは恥ずかしいことではない。当然のことである」ということを子どもたちにしっかりと教えて欲しい。

- ・私たちはいろいろな歯車が関わりあって過ごしている。それをシステム理論という。「学校に行く」という歯車がどうしても回らない場合、一見遠そうな歯車でも回るところから回していくと、隣の歯車が少しずつ回り始め、時間はかかるが結果的に動かしたい歯車が動き始める。
- ・歯車を動かすには失敗を恐れないことが大事である。ケース会議はこの子の歯車をどうすれば動かせるのかを考える作戦タイムである。子どもの好きなこと、得意なこと、できることをできるだけたくさん見つけ出し、そこからできそうなことを考え、歯車を動かしていく。この考えで子どもをみていくと、学校内でもできることはたくさんある。
- ・支援をする際には、まずは失敗ゼロ作戦をたてる。ここぞという支援を行う際には、失敗をすることで更にその後のハードルが上がってしまう。失敗ゼロ、つまりその子どもが必ずできること、得意なことを実践する取り組みから支援をスタートすることが必要である。
- ・子どもが自分のことを語ることはパワーがあがった証拠である。子どもにとって自分のことを理解して支えてくれる親以外の人がいることが大事である。そして、身近な大人である先生が見放さないでいてくれるという経験がとても大事である。
- ・中学校卒業後も継続した支援が必要な場合には、在学中に地域のコミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW）や福祉等につなげておくことが大事である。そうすることで、卒業後もその時の状況に応じた支援者とつながることができる。

## 5 校内居場所支援へのヒント

- ・本人の居場所を作るには、本人のペースを守ることが大事である。そうすることで、本人が「安心だ」という気持ちになる。そこまで待ち続けることが大事である。
- ・本人が誰かの役に立つという経験をするのが大事である。場を共にしてそれぞれが役割を担いながら、人の役に立つ経験をしていくことがとても大事である。

## 6 多職種連携による支援

- ・大きな病院にはメディカルソーシャルワーカー（以下、MSW）が必ず在籍している。MSWは、病院によって地域連携室や退院促進室など名称は様々である。
- ・他にはCSWがある。CSWが市町にいない場合は社会福祉協議会のCSWに準じた人が支援を行っている場合が多くあり、地域生活や家族まるごと支援を行っている。

## 7 抑圧からの解放

- ・「抑圧」とは人々が日々社会で感じている様々な「生きにくさ」や、なんだか「モヤモヤした違和感」「やりきれなさ」である。現代の子どもは、この抑圧を感じて育っている。成長とともに生きづらさやモヤモヤは大きくなり、子どもたちは困っていることが何かもわからず、さらに抑圧されていく。
- ・PCEs(Positive childhood experiences)によると、抑圧からの解放には家族に強みがあること、コミュニティに強みがあることが示されている。不登校の子がいる家族は、家族が元気を失っていく。そのため、保護者が安心して子どもたちと向き合えるように支えていくことも必要である。子どもたちにとっては、家の中で大人に見守られている、大丈夫だという安全基地を作っていくことになる。それでも保護者だけでは疲弊していく。そこで地域につなげていくということが大事になる。学校も地域の一つである。子どもには帰属意識を持ってもらうことが大事である。学校は大事な生徒の一人であることを子どもに伝えることが大事である。そして、PCEsの最も重要な研究結果から、自分に心から関心を持ってくれる親以外の大人が少なくとも二人はいることが大事だといえる。子どもたちが、自分が心から信頼できる大人の存在を感じるような取り組みが求められる。